岷江入楚

叁

特別
ヘ 12
4604
8

N12
4604
8

宮内省圖書寮

養 私源氏十九歳の年
十一歳源氏大将ト為ル
源氏大将為東宮御後見ト
東宮ト定ム 初位の中にうへ
三ま所なりて仕奉つるよしなり
養上懐妊ス
仍假厥后腹女三宮ヲ帝室ニ
四月ヨリ院ニ度御渠ス
大将君為 勅使参議信奉ス
養上見物ヲ六条御息所第車ス
殿上将監勤大将俄随身ス
賀茂祭日営君髪曽木ス
与営上同車見物参ス
源典侍折扇妻書哥送源氏車ス
養上煩物気ス
六条御息所生霊
斎宮可有両度御禊ス

東宮ハ冷泉院ヘ

48 3677

葵上生男子事　　父亮大将之心
八月廿余日葵上俄卒去事
葬送鳥辺野事
源氏君着妻宮服事
九月斎宮入本内門府事
六条御息所送付菊枝文事　　源氏君有御返事
同月斎宮入野宮事
十月三位中将着姉服衆源氏方事
源氏打橋子花以若君御気色事
源氏ヶ葵上女房中納言君ヲ招出仕事
葵上中陰畢源氏君松出仕事
大殿於源氏御曹司見平腎ヲ事
源氏衆院平中宮給事
着垂文袍袴事
還二条院改服給事

喪服三十月七葵上八月卒故十月陳服ヲ組九十日
未油陳服あくるとしのつごもり西対へ移り給事
ゐて忌明て喪服を脱給事
源氏君ヲ誉君松有密通事　　十二歳　大将
四月一日衆ヲ給事
衆大殿故消息お宮御方事　　葵上母宮ヲ

十四　斗房筆

巻

ゝれ（ふ）やなかすめる巻名（松）

巻名源内侍与源氏贈答の言により又巻名の事と

冷とするや源氏廿一歳より廿二才の冬までのまきなり

廿歳の年のすり花の事ありしかどもこゝにおよばず

和云源十九才の四月より廿歳の年中のまきと

寄義裏（む）

再々もて巻名とすり源廿一才の事此巻よりあり花宴源十

九才の時乃事をかく故なりさてもなを

旧説よ此巻冬花宴の日記年のまにまにかゝれよつてこゝにの駁

あり一疑云二条大后の友宴ハ三月下旬のまゝ此巻の

御所の御宴ハ四月の間いくそくの日数也

廿日よ朱雀院受禅冷泉院の主坊源氏君の従大納

言院御宴のト定ハこのまきにあれどもさ

らやニ疑云花宴巻にハ源氏宰相中将十九ニよりて

今ハ源氏十九才と但し従二位大納言巻

よ次よ一ぬまりて宰相よそ大将ゑ多ふといふくかの巻乃羽
に相違あるそ三疑よそ花宴年八廿二そ養老ゑ称
のホあり十二天よそ夫婦のみよそ有きすおかつ私
醫書ニハ女子ハナロそ有きすおかつ私
よみくろ天矣と八月のホをいふ四疑ニ花宴のとい
冷泉院ニ天心澪標の巻よ春宮よそ十二天の時ハ元服あり
とみくれ八二年の不定あるそ五疑ニ春院の御匣ニ
ゑあり初裳院よ入給ふよそ御ふそへあり八巻の又巻野の宮
宮よ入給ふよそ御ふそへあり八巻の御匣二ゑの巻
其證乃ゑし然八初ゑの巻の御匣月よ有へしや月月
のホ八其例なき故ゑ六疑ニ伊勢斎宮ゑ二代ニ一ゑ
なるそふ秋好中宮の母ゑるそふ紗ホ朱雀院更衣
の後乃ホ心れよ此巻に弁ゑ八ホ心を年うちへよより紗
色りしを指とさりそホりて此秋入ふとありさ
迫八朱雀院のりてなをみ多ふホ八養巻より等のホと
知て此六ヶの疑よそ源氏の御大将ゑ立の年のホと定ゑる

世(河)かりて後　関書御即位のホおもる也
桐(む)壺帝の位をはらせ給ふホ　春秋同
桐(む)壺の位を朱雀ホりて給ホ此ホ元寓の年ゑ
そ三年のまなるそ但五行ゑの御公はひちく
秋のまるへゑや
関ゑ此物語よ八御即位大嘗会ゑのホおもる也仍宣旨
給ふ一段ホ尋ハるゑ一再ありそ
ゑりおうく　秋朱雀院の代始なれ二条大后「北政所の
なき故ゑゑりの御ふそへおそまにもなき事也
(む)おうくニ八藤つかの中宮のひるをそへのやうそ
まそひはりて給つるホなといふりそ　私ニ此事乃
御方の配慮なるきし　ゑそ大(む)
大将よおゑふホ　私を宰れそ急大(秘)
大将ハ所職なるそ随分なる御ふりて院昇ゑる也さて

かくくき御ありきうもなのうえ
世伺より大将とみうり 栄花物語 大将は三位中将実
よなゝせ給うて大ねうそうに御ありきの実れの大ねうきこえさ
するいとめくくしう御めし
後二条関白師通 承保四三廿七任三木岡四月三日兼左大将
おもうこも 秘 六条御息所うも
私うもかこりといつくハ世にいうて
なきおとをかな給むるまわれ
むつれきき人ハ女つ中多
ほれをそよ人をそそねむくのや
私を源の御世ひかりきもたやう
かなひのふ御うくくしう
人ハくあるそのむくるや又源つ女つのよくれ
なくれそうよいうもれ
宇面白くー
今ましてい面うー そうり院と藤つのれのひうのまを云

くく人のやうにて 秘御脱後のりそく人のやうに海蚕
よそにおりしまん故よ御
今きさたい 秘行幸敬
朱雀院御住ようきふ少
とうも 年月 関白 光業卿
私をお家賀者 藤蚕女御
宮の品代いもかう御うれ
敬つ人その御ーまでい
かやうに院よ女つの和
行幸敬八月裏よのこ御
石やもきり 秘藤蚕ハなう
御あそひまそ 秘院中を
いほの御ありまも御住
院よ和そく又ろ仏
つもいまの御ありまし
くまきなそ

てんそう立后は受禅の後のまなり
冷泉立后すゑ有下
私云后は谷釣とあれど細に見るにさよう釣すゑ有つ
后ときこうとは院中女院はさもしなり天皇に申のうえ
御門のれいなり

大将者よろづの
源此時三木の大将也若輩にすゑ源へ作家
とあり　参議大将を兼る例河海にくし
蔵花物語に私云前より泥る百官之二条関白すゑ
泥氏を大将といふまでもなし
大将すゑ
大将すゑ　天平神護元年正近衛府
平城天皇大同四年四月廿二日改近衛大将藤原朝臣内麿
為右近衛大将坂上田村麿為右近衛大将
参議亜大将例
藤原房前　大将　同豊成　中衛大将此三下十人員之

藤常行　右近衛
河ニのもとおもひ出つゝ　中将景之
かゝるにつきて思ふ　源の名中心
花つゐにうはうつくしとおもひ
思ふやうに古今のやうにつゞき　稽
記者の司也少将原小事院
御息所といふ御門御寵持給ふ事也
前坊の妃女　前坊とは東宮を稚也
ものがたり　坊とは東宮を稚也　花同
秋好中宮六条御息所女房ト
秋好中宮前坊の御むすめ入内ありし御
定ありて則又明年ぞ給りの　私此前坊桐壺門院
女房ともなり
秋好中宮とは代の始なり必斎宮
朱雀院の代乃始よりト定して斎宮を定られて七年
野宮へ入内明年ぞ給りふべき

卜定ありて三年めにくらゐにつき給ふ也 けふは秘に同し

斎宮事

崇神天皇六年以天照太神託鍬入姫奉於倭笠縫邑以大
國魂神託渟名城入姫令奉垂仁天皇廿五年丙辰三月
依神宮御託宣奉祝伊勢國五十鈴川上以才二皇子
倭姫命令着御祭給是斎宮始也
景行天皇庚午才廿三年第二皇女奉仕天照太神
延喜神事式曰凡天皇即位者定伊勢太神宮斎王
仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王依世次簡諸女王卜之

大将の御心さへし 秘 六御息所も源のそめくる也
私御息所もさえの詞よろしくもしらぬ思ひつゝなれは
ありしうき御息所うきくしも疎遠なるなりみえたり
おさなき御ありさまの 秘 秋好のむすめくおもふなる也
まうけて かくあさて也
ありやきれまし 秘 源の心をもそろうなれと此斎
に具してやくらんと思ふ也
私云かやうに御息所の内に思しきこゆるに物の車あり
それのまゆありて又葵の祖のまつりにまありつる事
ありし故なし伊勢へ下りまくらう給也
院にもかく承事 桐壺をとりしめて院とは申す
私云かく源事とは源の疎遠につけて御息所の伊勢へ
やくらんとおもしゝ事也
故宮の 秘 文みとの源に御教訓也 故宮は前坊也 尤御事の
御才也
おもしとき忍し 前坊の御息所を御寵愛ありし事也
となつなり 源のよの何様の人のやうにもてなし
あふすゝの給也
いと行き事 事と句をきりて見る也 並はかろくしく
まてまたなるつけて行しき事一つ又斎宮をもし
いふやうなん今も思うへし
秋好をもんとの御子たちの
斎宮をも此みゆらん

やうよ御公よおかせそもそも
いはるよつをそくし　何すよつをそくし御息所一源のか
よしみふ祖うへなろうなるましますそも
公のそさしよ海う祝て
うそ光なるやうまれとうあるほきまるせめて
ろくくそ紀いよかくしみすかいのまま
ワれらみも　秘源のかやうに世の公のりくきますそも
人のうめ　秘又御門のの詞れおやら六御息所の祖のよ
桐御つの源よをへれおやら六御息所の祖のよ
なり紀しまにうり　秘
きくそ公の　秘藤　むな　つ
　秘蔵のまをなろきをそもきうめてるも
又く院みもきそ公
又の御ろもワの御るあをそ公
よくや乗なくかやうに院もかれなくそろしめ
又あれて　秘源の公
ろまるくきいまる思しるふよう
女しるきき御うれ　秘此次の年御息所ホそいまの内
なの紀よ公心
公よ紀うね　秘御息所の年のまる次より源一紀
敢のあるや
れよ志ひるまよ　秘源のろなふれ息所の御
きそ紀よそふやうそなりてよそ公れ
紀をれ息所ふうみ
紀そなりてよそふ
此御中やうに一旦の板よそくくそ成ふよの
のあるくき好文の道のやうになる思れ紀あ
も人のるあもはよいなるきや御息所と源よの間
よ紀あるよやいるそ公ようよ御門の御よつをて
よくや乗なくかやうに院もかれなくそろしめ
又あれて　源の公
ろまるくきいまる思しるふよう
女しるきき御うれ　秘此次の年御息所ホそいまの内
なの紀よ公心
公よ紀うね　秘御息所の年のまる次より源一紀
敢のあるや
れよ志ひるまよ　秘源のろなふれ息所の御
きそ紀よそふやうそなりてよそ公れ
紀をれ息所ふうみ
紀そなりてよそふ

院よりきこえ給へ
ふうふうもあるも
おりなどもあれど
私云 息木のみとみそ
私云 源のみさしおかるゝ
私云 息のみや
私云 私を院よりきこえ給へ世の人もてなすくなりぬれや
源のおりてついてうちをゆるしたまへ給へるをそれや源のきこ
ちひろをゆるしたまへ給へるをそれや源のきこ
てなきて面へ出給へるをそれや息木のみ給へ
ろくに通よりきこえ給へるをそれや源のきこ
き事に給ふと聞給へるをそれや息のみ給へ
給ふの姫君 秘 桃園式部卿の女 はゝき源よりきこえ給へ
始給へるをそれや源のきこ
人のてうしうの事
私云 私が家事と六御息所のうなてつきて給へるをそれや息木のみ
おさめ給へと源氏物語の一ノ巻の四貞女 横笛君と空蝉と
人々しも 秘 六御息所のおくそこと
をそれや源のきこ

私云 息木のみとみそ
私云 源のみさしおかるゝ
私云 息のみや
私云 私を院よりきこえ給へ世の人もてなすくなりぬれや
源のおりてついてうちをゆるしたまへ給へるをそれや源のきこ
てなきて面へ出給へるをそれや息木のみ給へ
ろくに通よりきこえ給へるをそれや源のきこ
き事に給ふと聞給へるをそれや息のみ給へ
給ふの姫君 秘 桃園式部卿の女 はゝき源よりきこえ給へ
始給へるをそれや源のきこ
人のてうしうの事
私云 私が家事と六御息所のうなてつきて給へるをそれや息木のみ
おさめ給へと源氏物語の一ノ巻の四貞女 横笛君と空蝉と
人々しも 秘 六御息所のおくそこと
をそれや源のきこ

源よりきこえ給へ
ふうふうもあるも
さまでもて人なく
もて源よりはゝきこえ給へ
ふうふうもあるも
大殿よりかくのみ
かくのみとの御息木のうなてつきて給へるをそれや源のきこ
あまりつもれや 秘 養上のみ
くてこと給ふるをそれや源のきこ
まを源のおりてついてうちをゆるしたまへ給へるをそれや源のきこ
ふくるきこえ海の
給へつくれと源のみ
これもくれもれや
ゆしう
こえ海くの御てしを
給へなるとい 秘 御息木のみとみそ
源よりきこえ給へ
ふうふうもあるも
さまでもて人なく
もて源よりはゝきこえ給へ
ふうふうもあるも
大殿よりかくのみ
かくのみとの御息木のうなてつきて給へるをそれや源のきこ
あまりつもれや 秘 養上のみ
くてこと給ふるをそれや源のきこ
まを源のおりてついてうちをゆるしたまへ給へるをそれや源のきこ
ふくるきこえ海の
給へつくれと源のみ
これもくれもれや
ゆしう
こえ海くの御てしを
給へなるとい 秘 御息木のみとみそ

是ニ云条ゝやを江へいてゝこゝろなき
なり書云御息ありて又あよ宮このまゝありさやうにもうき心
ありるよしよいそしく宮してそうの旨
その比斎院しおりまの紛
しけれ云院御ものり
斎院事
嵯峨天皇弘仁元年置斎院司以皇女有智内親王
為斎王
延喜神事式云凡天皇即位定賀茂神斎王仍簡
旧親王未嫁者卜定
筆生卷云御ぐしかゝりなびまりし云院もうち給ひとの
ふ心ありけ事院
さきいとゝの女三人ぬ給ひ
弘徽殿の御腹花宴の御賀ありし人なりも
桐壺帝三の皇女 御母弘徽殿ノ太后
延喜式云凡定斎王年即卜宮城内使一町為初斎院即

先陳川頭板塀乃入 又云斎王於初斎院三年斎畢
甚年四月始将泰神社先擇吉日臨流祓禊ニ
即廻帰使面野宮 又云凡斎王毎年四月中酉日養上下
而社参
今案於元の斎院ハト定ありて後東(賀茂川)
のまのてらに初斎院(入ゐ初斎院とハ大内の中よ
大腸職或ハ左近府をしつらひて入ゐ
すまのり甚年の四月より御社(まいり給ふとて祭の前よ去
日々撰て又御禊のすまのり則当野の野宮よ入ゐ
を二夜の禊ハ中の酉の日賀茂社へ参給ふ
すまよりふる毎年の御禊ハ必午日の巳を吹て
ほど今女三宮ハ桐壺御門の御譲国の後ト定ありて
初斎院へ入給ふ初度の禊の事ハ甚詳なり今
は巻よいつゝ御文給ふとその二度の御禊をいふそ
の故ハ初度の禊ハ入給ふ十
よハ大納言中納言参議ハト御供ふ毎年の禊

よの八ノおうに侍奉をへん此度ハ三てしかをたゝかりつるまゝれ
くあり仍二度の祓うさうひうの初度のまりハつゝまる忌
そちおよびなり
秘女三宮の斎院よ主殿寮神事うとにつきて公家
まゐりつゝも
よ宮うちのさうつき
かんさなれと
人うじみても
文を定りるまもなりてし
こけいの日人うちめう
花延喜式よ二度の祓の勅使よ大納言中納言各一人参議二
人四位五位各四人をつゝく十二人勅使をそれを枚はさま
ほよいうり源氏大納言参議二人のうちなりもしくハ
そをいよ山陵よいる二度の祓うさうひうまねし河海
うまいも幻仍なうさ河よりて
弄ノ系花よ同ノ書く

私
尋院をト定して二度の祓あり元ハ并二度の祓とみ
えてり花ここうし
却しまた 秘人をえりいるしん
トかさねの文のもゝのをん馬てう
汁祓の日乃勅使公卿ハ深儀衣束を着代馬よ鹿鞦或
秘かやうの晴乃日ハ皆深紫衣束をおよび色の袴を
文くよそめて見ゆ
少書大うち法式のうへよりひうなりて初
沼のかなりよかまれをはうまつり紗
うりさうちうしてそ大納言
秘大納言奉の御花をよ
尋院汁祓大納言勅使三位重行右近
國史云 貞観三年四月十二日丙辰賀茂尋内親王臨
鴨水修禊是日使入営陵
大将源朝臣定監禊事云 尋院汁祓大将儀奉の例

はるゝれつゝれと　秘人よせ
同六御息所をそねやうに
の人々のりうん
さうりうそゝれいをそ
葵方の人のよし六御息所
よくやうれいをそうる
大切成をそうそう　葵上方の人乃羽
豪家も　きんをりをなを
源をそゝ指つよゝうと
その御ふさの人も　その御ふ
よゝ父大臣の人をの源の
の人ゝ御息所方の人をそうそ
ゝ息所のも人せんしてそ
御息所とゝ大臣ふれも
御ふる喧嘩のふなわ
れを仕義をそうる有家
のり

はるゝ御車も　葵とゝ
人ぐるま　の裏入
清サ納言枕そのまゝ云ゝた
まゝりつゝきてゝ
出車をゝ公方ゝり點せ
給となんゝ多ゝ枕そのま
ゝき木の御車人ゝ源ゝ
こゝをんとゝみうりまゝ御京
もをゝこゝのみゝのみ
なゝ御をそゝおもゝそ
ゝやまゝきをゝ　御息所の御車のさ
物もゝゝなゝゝれゝ
なをゝや御息所とゝりて
口ゝゝゝ
かやゝれ　秘御息所の
ゝゝれをゝゝ

出車名　権記ニ多此名アリ

河 青い女房車の 楊をそけ本儀ん
幸 一勘 女車のハ楊を用ゐぬのうりくるみてそうたくる
見初よりかきくさる
秘 牛なとそつしくろ
車のごうに
牛と用とハ祇用く 稼の院
何よきうんとよふ 御息木のうち
見初をたして
初もうで
とうりいえひる
秘
とうりぬと
はるき人のハ来ひりの
心よりや
はてのくるよりひのれ
河 古今神楽歌 はての浦ひの西川より狛
む 剣をたうんとハ
5

松 剣
河 古今神楽歌 ひの西川より狛
幸 ひの西川より狛
そんやと紛なきも
と心なくてこなつて
私に幸の事を剣
うんや源の方より剣
実にてもうし おゝ狛見車ともあそんつうり有
しく
うりめにとめ紛し 秘 源の礼と見初て目とめねもの
大廃のハうち礼い 秘 慶上
御伝の人〻下養上と
ハものハい 秘 源の伝事の人〻ハ養上の車の御方て
礼をいくて
しく見ふ

大将のおかりの随身厩とのそうなるものをすべつなの
すみしのくに笑ってきりの事うの行のつぼなるをい
ふ右をの部人のそうつるうつ
(い)大将行粧刷う時一負府官供奉をそ例のまも右近
部人のそうい部人右をお監やつるさことに皆みをせう
さくんわり　近衛府い大将
お書いさくん心六位侍お監のわる時右右をのせう
うおりかりの随身とかりをあの事も一負當日いう
初よ随身よ侍をしるうくもそ
(秋)花今もも源氏才一の部弟やとそくくうくもそ
只すにすをくうへうくかきなるも
(年)口傳云此物語の富言の部
むらめにめけうきうるなる
因云源氏よ秘すするまなもうきれ向
さやうの面きうにかやうにまをうもまをいう
結掖よかきなるまうもう

(む)此事才一の部義心説物小先うの随身
といふ二負ともなくいる近衛お監将曹府生を一人
ほくかりうめにわくしてはるにまをよ
随身をいるこかきりわりて一人つめ
具をるもの長が時よそさひて
の随身とふ修令納言の大将の右右の
者長一人近衛人をゆるされての具
もるそのうへ人をの時お監お書府生を又一人つ
具をるを一負ともうの随身ともふいまも皆地下の者
なり部人のそうとい厩とのお監をふれを一負
よ具をるまいふ物なきまをまた行幸の時右右近衛
お監お書い本陣よ伝をそほよそ行うて乃一負
よめりてまをまた一負の河をるをいそ
(秋)おのれもるもの
(秋)右近の部人のそうい伴与人
兄弟人　おをまをの者にい時のまをるいそ

おもひかさしそのつゆそ
と詠せしけんなり
さるをみぞいぐんも　右近のさうの御随身
見くらべみちくるも　見ハ皆地下也　迎ハ皆殿上人也
やうの時の行粧なり
そうはるれいの
源のさ海也
本文もものいぬ
河君子之徳風也小人之徳草也草上尚之風必偃　論語
訓若風行　應也草　蘇　文選
行かさうそく　秘見初の女房ども
河清少納言枕草子に見えたり
人のいそきそう　市女笠よりあや中ゆいかけ
ふやうに　或抔白きを用ゐるよくて平人も白きを
ひらなきそ昔うへは着ず　入さうへは白きを
私云ふ百年もうのさまそありしと　関及ひなり
笠ともいふ　但同一物なり　市女笠と

私云伊勢物語に
こもり居てと有るハ
下女などをつれて
ゆくなり
秘老女などの
ゆくやうに
男もみてやる
ぜんみのわたり
尺行けり事に
かくきこえたり
尺にかくなり

又ものいふ　私云世をそむきて尼などの如くなるハ
ぬすと迎伊勢物語に
尼などに
尺くせもの
尼のおもてにはる
ふことなりに　秘老女尼などの見ゆるを取ていふ
ハうくきものせんと　尼などのつゐ
関白源の世をそむきてくらかくれ
源氏をもくるしくなんとするハことわりをも
くらうもせげき　老女などのかしきこえたる　秘云
ものの口しゆくみさうやうなる
ものをつくりてひらかして
大鏡云一条院春日の行幸に御輿よ大宮東三条院詮子
そひのせ給ふハぬるる世界の民百性まで神仏の
やうに御拝をし会をそれうきことなり
宋朝の司馬相如と

なみ〳〵ならず額よろこぶ事通鑑と同書にみえたり
秘 祝宮は司馬相如といふ心なりて名とせり司馬相如は漢人代の人也
公の宮を如の字よりおやまるなれば通温と宋朝通鑑(元ノ宋名通鑑一見ノ花ノ誤)
うるはしく司直充起岡衛士以下加額曰此司馬相公也
うる〳〵
并 充は司直公の事をいふ心也
おこゝろをなり 成卅九年
うねやうの心也
なのかかのうんやう
源氏物語へ物見ながうねやうあるもの也
尺八通奏もの也 源の中みしおくりほきりうの人也 忘
をしへやうといふ文机の
第末巻も文机のすゝもおありとみえたり
公のつまり 秘 皆公のうるはしくうる也

のうる也 頃なよ頃なとふ心也
この宮と申し 礼又ようなの人のさまなりけるもの
ましてよくしこうるうもの
源の御子なよかくほまし祖の人さくる心をさうする也
ましかなるも御子なの人なまいかやうなる
及ばうき源の御子なる御名をたゞ方の数なをたゞしり
あらきなくふ人なり
式部 朝臣の宮さまして
ともまをゆきまして 源の姫君の父宮也
弥生とも染もそこめ紙 秘 桃園也 并
葉なよ弘徽殿の詞なる 桐壺なるの巻
公のうる也 秘 源氏をうりての行也 源の教父也
姫君也 桜姫君也
うる比きこしうる紙なり

権姫君の御事也源の幸来務んこうきこえおの姫君
のみ仏にぬかづけるなるもの源の御ありさまのやう
くさにかくしもいそぐみえをえ給ひてなの
給ふん人なりもかやうに務んにたなりもいき
もせきあなるを御覧て源よりいと心ぐるしく
げにくとおぼしさわぐ権の頁仏なりそ

年ノ末同

きえぬみにきてうきそえて見ぬ仏見給ふ九三ノ
関也け権姫君に参を見給ふ九三ノ
私をうきふ人こうをいつるさ而只今みるかと多姫
君もけうきそ参をみるけうり

参の日ハ　如月中の関日也

私ニ賀茂参ハ弥月よ而度あり中の申日ハ國参と
ふれハ飲明天皇の御宇ニ月よ吉日をえらひてなつ
らるゝ而見あり又私よ記ありて山城國司ふれ
を検察をえりけ関参ハ賀茂の本参うまやや
而の日ハ参ハ公家より使をそれそれ走馬を駆ふ
わたりかうへきさや関日のあり中の申日也
中の酉日の参ハひつしの日先上卿陣よ着て六府を
あつて警固のようを作て當日の使ハ近衛の中将
なりしより名を給りしより名ふ人を参権の勝
そうそうる飲明御宇ニ賀茂社尾の社司ふへの日より始つまおこ
上賀茂別雷二の神参也已下略く　紀ニ公事根源抄
私賀茂大神ハ山城國の地をえて不しませハ中の
申日ハ國よりしてさまつる参也中の酉の日ハ酉表り
の参也昔ハ流鏑馬ありくるハ中の酉の日祭也け
お話よりかもけ祭ありく
大殿よハ初ハ行次　秘　参と也見物なきと也
かの御車のおあるへ　秘　源よりくる人のうる也
あるへりたいかうる人の車度長殿の家風その行り
加　参とるのまと也うりたいかうるかもけ祭ありく

いとまうさん　　雲の海やいかに髪のさ海やいかに髪のなるらん
しかやうなるふまれなるなるけなるん　　ゆまりもくくくとよ
ちひろと　髪のみるれよの枕羽九千尋
なりるまきる扇のうえ名ふさのおしもも未に河上のそ二年
かみそきの奥定よ海松を用る
九禅　碁盤上に　山菅　山榛　海松青月石二置そ
をおな髪よハサミそふる　ハ此巻九千尋
祝そ七河海流よし分へ
うつかの十一云ふみのうえ
るるもいそそうん侍あ
源氏名のる扇といそひ
安堵よくくる扇の海し定なきと源氏可
うふくきの仏や
みちひる堵とい源のな
なるいるる仏や　尋日

物よかきつまそ　雲のさ海や　源のめくうえ
久しておまるく云まるる　しるも地見車おなきらし　猴
のロしたかりしれよはしるけはもしふや
しそうそれおくうのかに　四一陳
尼を馬場宿屋七ヶ
陽二条大宮や
むなくハセハ七殿尼よそ方とのる情よあり月の詩射
の時中りる名先を家参大四の時小津そそ
る一名を東へうにりそ方とのし殿の私をにる
河や
ふまき女車の　源典侍
むるやいうを行ぬ　うにになとに御車をうれめそ
めそれよおうきうえんと源典侍の人もてまる
いうるまき地る　車
門御とり行る　車のやなれ源いるけ
いそ行る　源の返答や

私云 みそかにあひのり ふくるなる人のまことなる とふ事なり 何事もかぶる 心ある事也

ねいたし いらへよき かたみえぬるとうらやむ心也
扇のつまを折りて 河 檜扇也
源典侍 檜扇のうしとおもふやうやうとつきなれ
もへしや人のうきをあふひ神のゆるしの日をまちける
抄 葵はあふひと云心也 何ぞ人とあふ神のゆるしの人を待
けふといふ今日の葵のよりとこそ知しつれ人と同
車しけれは よるひもすと 私云 人とあひのりけるを
人のうさ女をとは よそなるへし
志あのうちにも 河 おもふ乃洞れて勘
私 むし 志あのかたとこ よそ事あるは洞連のうちしきつきこ
川音はるかに 心は知りなるかなかなるへし也
弁 川音未見 勘 閑云人の如しある心なる文にて源氏九云
九條 弁 本抹しとして 志あの内はちかね源氏大臣
乃山けるやる寄よあり周防内侍か音也 源氏物語をかると
内侍かなれど見出せ書し也 續拾遺云也
けふ志あの内とはあれとも心あはれ時代もあり

川音なくても心はあふれ志めの内とはいしこの参に付てまつり
心は神のゆるしと得へし九人の志あとをまうる源氏君なれは豈も
知らすといふ事をや但し此物語よ志るはちうちなる心源氏ぬ
あそはしもすきと云よいるへしも源氏物語同時分の音也とあり
私云 此弁 弁花云三本に立し 能九天のうきのとらしけ川音
又も用ひしは 川音なくても心あふれといふ事物也
源典侍也 まて源のちしまた也
河 今めくには みつきうる詞也
かのなりしのまけ
つまあく
近江氏 かさしけるなそあしおやかしやさうら人とはなへてあふひを
河 八十氏とは人の氏姓のあかき也 心也 あまたら八十にかきるへ
らぬ或百姓とも ふ也 八は和訓数の多と也 八十湯とも八
秘 百日行とも ふされ多心也 八は数の限也
源の一度かさしし と心きとや八十氏人とは おかくらぬ
人よなひきや まことなる物なと也 姓白のあふひアフイトよむ
へしあふひとはいへしへ 此者なれは 葵今物名に 葵をとく
して あふひのまきにりしてあるそ 葵を心えにあ

後日と後ハ物の
後撰加賀民参の日物見給ふ女の車にいと入て給に
御ふくろ八十氏人のもろ
ゆるもたるそしいなの
聖ノ系の末ヨ暑く
ふりて心　源のちとみくの君
くもかしけるれんめとして人のめなるを系とりた
おもひ人くのなるそ
源四位の宮也　聖日　関白
人よおいのりく　源と堂と
栄花物語云障子西宮和泉式部と申す車にて参れた
或ア云氏義ありて堂の紙の切を付ふ今朝堂
花よいつれ八栄の義とい行事ふめて　れ八車の中
ルアの惟々そたり
河ニ八大堰云帥宮和泉式部あひのりて参のつさん行とも
ふやまうかふ人　源四位のとうとき人なりと

一日のれのうさ海のうふりしり
先八ものの人ふ
私抱ものよ云ひふ八車ひ
ぬきあるハかはきぬ
抱ふみ
いのふうそくふりし
しくのうふ

うきふんのうなぬ人
ぶ海かふそひれと河不抱
源の位関云ひふ人とうふひふ
并し位卿位云そし
さふぬ人心ふあひ
かしふま
私云ふかふぬ
のうさ芸史うとい源四位のそ人
八源四位一の九位ふ堂

或御所様よ人の魂の夢に通てまうとそや

人を恨ずしうらめよ人にうらまるゝ
すまよりあやにみそ
おなり許つゝも

元禄二年の生霊也

げんざも　　験着也
御かうのそこかこと
元いつまにうくひすの
宮を伝二条のきさき　　楽上のくわさき
てかくるふよも卅日
物もこ也　　卅日
ふにくるゝめのと　　菱上の六条の心
てさおこらうまの霊
おやのゝう

深のかな行平と大殿ふ

恨る

父左大臣ふつくりる形見を

菱の新也　　物のもの
院うりし　　平秘　桐壺帝也
行平ふる人のゝ方
盛物のまうこいよ
宮を伝ふこうる
源融の霊也　　菱上也
かの殿よ法ふそし　　霊のうるみふる
のまます也　　平内　物
恨るとをふる物也
か、御ゝ物ゝのみれよ
大和守よ仏事すをし
元ゝ御息所のゝ也
子のうりしのをゝ

みといのてさね物也
おくこゝよ　　物
こゝはくくよ新ふよの
菱の新也　　物のもの
院うりし　　平秘　桐壺帝也
行平ふる人のゝ方
盛物のまうこいよ
宮を伝ふこうる
源融の霊也　　菱上也
かの殿よ法ふそし　　霊のうるみふる
のまます也　　平内　物
恨るとをふる物也
か、御ゝ物ゝのみれよ
大和守よ仏事すをし
元ゝ御息所のゝ也
子のうりしのをゝ

さとのうしろにくさしげき作也　秘 [illegible]見えたりとあり

私 遊仙窟上夢魂与児通也よみて[illegible]とあり

まだ見ぬ[illegible]や

け 月をまてしばし[illegible]御[illegible]かすゑは空[illegible]

うちしのぶ[illegible]　弄秘 [illegible]云々　御所九年[illegible]にあるさ

[illegible]けへきたり　御[illegible]のふ[illegible]

[illegible]や

いまなつかしく

[illegible]世[illegible]く

[illegible]

[illegible]かけし[illegible]

ゞ [illegible]

以 元[illegible]

以 [illegible]や　[illegible]のるの[illegible]

[illegible]

け [illegible]　弄私同[illegible]

ゞ 面白くかける[illegible]の[illegible]

[illegible]

け [illegible]九月[illegible]

延喜式云凡斎王将入太神宮之時自九月一日至晦日ノ

ゞ 大内のうち左衛門の[illegible]

以 [illegible]　弄 [illegible]　秘同

いつく[illegible]　[illegible]

野宮[illegible]　[illegible]

こよひの[illegible]

ゞ 斎宮[illegible]東門よ

[illegible]の[illegible]

[illegible]西川[illegible]　[illegible]花[illegible]　弄同

かげ[illegible]　[illegible]の卿[illegible]

[illegible]大事　秋[illegible]の[illegible]斎宮の[illegible]人を

[illegible]の[illegible]

まいる[illegible]

[illegible]　以 [illegible]のや

[illegible]のかたまつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

に勝ち調食畏母使補虚強氣之又左傳桓公六年傳曰
九月丁卯子同生桓公公孫佗殺桓公而代立

同姓人庶後の室家を御つ
男をさだめたるすれい　父母ありて面白し
ういうて面白し
なれどまだうら心ありて　養うものを御ふ
のすりその心
ふうかふもいうと
父母ありて男をさだめたるすれい
するふうに為ますけいわうまもりめうるやう
うるはしきのと同姓
うら心ありて　養ふ
養かたに従ひつきてやりの父母
養のこうかうとも
くめりそふしてあらをもうていうめうさる
のうふいうのうたりのつひいうたるものとい
きけるかわし

同志郡集のすうう
對面ふまじ病中ふれ
もそかうつきひてか
ふくわれいう
左氏曰ふまじる
左氏曰ふまじる
上の面目ふうふ
ひうこのいうう
さいうりいうかし
いきく手金ふかふ
力の去れいふうの
父母の死ふへ
中判ふう
しふりのへふ
てはふうまそふ
ふへつまそ

同志郡集のすうう
對面ふまじ病中ふれ
もそかうつきひてか
ふくわれいう
左氏曰ふまじる
左氏曰ふまじる
上の面目ふうふ
ひうこのいうう
さいうりいうかし
いきく手金ふかふ
力の去れいふうの
父母の死ふへ
中判ふう
しふりのへふ
てはふうまそふ
ふへつまそ

のうりゃくしてこれをいう
(2)海のひとり佛(3)ましまして
のうえで(4)御(5)ありさま
露ほどもうたがう(6)心
そうえのほかありえを
みてはいのこ
(7)平生のうえをもって
(8)世界(9)国土(10)初(11)うくかた
(12)又(13)はうまれてこのうえ
はうまれ(14)ひとりあれども

(15)ばかり
(16)ぜひ
私(17)のうえをもって
私を(18)御(19)ひ(20)月(21)為と(22)ふの
(23)ごとし

(24)ごとく
(25)ぜひ
(26)ぜひ
(27)ぜひ

(28)ぜひ

(29)ぜひ

(30)ぜひ

(31)ぜひ

(32)ぜひ

(33)ぜひ

(34)ぜひ

(35)ぜひ

(36)ぜひ

(37)ぜひ

(38)ぜひ

(39)ぜひ

(40)ぜひ

(41)ぜひ

(42)ぜひ

(43)ぜひ

(44)ぜひ

(45)ぜひ

(46)ぜひ

(47)ぜひ

(48)ぜひ

(49)ぜひ

(50)ぜひ

(51)ぜひ

(52)ぜひ

(53)ぜひ

(54)ぜひ

(55)ぜひ

(56)ぜひ

(57)ぜひ

(58)ぜひ

(59)ぜひ

(60)ぜひ

(61)ぜひ

(62)ぜひ

(63)ぜひ

(64)ぜひ

法師ならしけるなり
付 勝之露なけるなり又云なりけるは皆公字なる之 又云賞之
又異 万葉　私云法師ともまけりうるなる之
なまりしかみれ
付 山ざくらさかりなれば千代の春の行まはれ君か代の春をつくし
手 後檜本わり千代ころく絶えず
あら海しうらとお浦しなくさむれ
流の夕香をとめてまちてみるやみさかき 此段は其の一
首の制くかきり
定めとり見けりて　必 母宮之
此はものいろさ　或村中陰の中にて共佛事を
必 此経は彦なるの経堂のなめしをとなかをけるとは朱書
凡は物流は蓍若必裏の理を患は本のよりり蓋とは夕香力
を延生あるて十方なるべきを以中也朱め夕るをゑに夕書も
のまるなるやし
なのめ山もかうなかり　必 蓍の中を菩提ゑ深しく詳しかきり

又らくひねくをぬ　必 女子の兄弟なきをさ
神のみれ玉のくらけらりましん
付 凝牛章とし珠権心中丹　伴行人 或村云君知文ノ為こ
手 奥入云那本文ニハ崇し射とし珊瑚とら子而わり
必 本文不分明て取文切るまた夕所りやし
ふうひあさきをいふし本文不分明
叔云弓回向長　此名帝桓けらりまみ玉くまれてふけなきまく
をとうつりひつりまる為れ中ト適達院
らひえさきてたるさ神のとみれ玉くるきれんとをろしろ
さひうら此幼とよれり
二条院るたわるいはふるを　流の二条院へまへおら移すまれ
そあらして代ゑへは中くおとせわと
ふとりは　とのひなるしかるや
かのらやすふは舟宮みれ左右のつけよ入御よまれは
付 斎王三年斎同ト定ふらり従月こ入るふてや左衛門府にと
従三 清従継をも来り水楽継は京 親王とてわり舟宮入御後司

儀前日上て其陳ノ令勅御儀日時一并宣旨荷前以左衛門
奏聞スト云々并両日使を廟立后ノ前ノ右馬助以下五
位前ノ前日参仕ノ由を奏ス闕之日者ハ五位前ノ催
遣ニ三重ノ牛ツ并内侍典侍前ノ下前服や次入御路寛
一以下入御後日ニ儀ノ上ノ

八月は後月次の御ついでに中に内の後朝は今夜に
ばけるとぞや左衛門のつかさ入がたくれもなかり
しぞ今夜之左衛門のつかさは結政
いかにしきとかさなりけり
厳重の業義　後月の文がてたらく　業義みなるか何まで厳重
なりけり
なやしみけい養丸が時服下されるとけくかるは
よて此是ハ家ある
うしむかしる
松もうし旦にさは文左衛門の此後をきりたる事

みちなりやしろはいは養丸之世をかてはりけるを
ねのけふよの中をみなてかゝ人の四ゝまなきをいとゝ
さかんのけてきゆゝるかし
からなまし
弥のりしき殿　夕霧のまゝ
まつるのいめ言ん　秘芝とや　宮家もをもなりてまの影かし　私不及川云々
けさしもてねりゆをしとは以後二条院へしおとめ経
ちるはニ丁ぬなもよ給の遺し養をつよ住ゆく方なし
戸井の人とは　女房運之
ちうき失くなりて　此丁の失くなりて
みしきわれと
けずしもあれ秋やは人のいつるつきさらぬよりよれる此しも
手秘川号同或所を人は英てうるにましりの方　アルシアルゝ又三五己ゝ下物シ
なにはに川周つきとい
えりなるちやよ念仏の　必こうりめを傳え
常行三昧　川戸ニ阿弥陀経を誦するこ

あきさ秋のあれ
必川ら
ま初もこれ
行流古秋上
吹これ
やまかる
人の
おくかな
杉ま
ここさ
方へ
花田
第の
第の秋ころ白笑そし
たいまをれの
行をさり
戒杉三川真木
て後の
いは先うて
何もいてをさる
ていまうくりの
きこしわな
心人のかけさ
六川真木
人の世をあれとこそ
寺第よりも秋月秋人の
下れてあれる
私こ
後の秋の
くいやのやにるあり
行第の秋ころ白笑そし
たいまをれの
行をさり
戒杉三川真木
て後の
いは先うて
何もいてをさる
ていまうくりの
きこしわな
心人のかけさ
六川真木
人の世をあれとこそ
寺第よりも秋月秋人の
下れてあれる
私こ
後の秋の
くいやのやにるあり

ひ
本妻の脉ハ三ケ月之縁ハ文字しなかをもいそうか
こゝろやの句るを忘れ添保よするの事之ひともりける治
なとすハ変れ紙の積しるたにてそりかへる也文字
妾脉の人ハ句法わりけんや怪脉ハ文字句離之れ大志
まりて文字をかしハ人の心のるや文
然けり第一に本妻の脉も姉妹の脉色脉赤日脉三
月とすに怪脉なりれを三従中脉ハ文字れ次よりつを
もうすなるしらそ添ハ文字しかられゆへるの事
し色とさなり添の文字しれハ内ともなりしられ
故なれんし

それなひのつやゝの妙
秘弁 花よみくらり
弁 怪脉ふ承の清を用る例わり是花なる下読の句とみて
ふり花なるすれの事ありて
ひ 怪脉ふ紅の清を用るハ古保三年二月一日定子皇后
裳ふ衛堂閑白強ニ大色の下読を要して此迄みてより改
中安略ふそ手国ニて事り

秘 姉妹ふれハわれにまるあれ之
中脉色ハそわされ
三従中脉 ○ 句ともりさくて雨のうちをとけれのてをはをそてなるもん
必 添の備しかし句をとらまて中脉のあ之前れ劉禹錫
ふ二首の詩のうちに只無長在漢陽渡とも以て歳内
春とれハ出ハいつくもとも定りてしとし
私との第面白しろ句を定なさ付句れをそろへとあるや
ゆく来ふしやそれろくとのやうりのと
必 此添面白之他人の句なりハ添へゝ近も姉妹の
手本ろ此ハ早卞しろき也
私り来ふしやりとありてきれ
弄月
次位 みしへの句ともりしそりけへいと付句ふさまくてすまん
弁 此方をわれし指句ちの余情をそれや
必 面白なし法句の余情ふれ中脉の方ハ添の句をとうけて
らさの句とも句ともと川ふ形して之是ハ本しへの
句ともいへし欠月ハつりそやヶ月りりに掛けるよ
とある句のすくしうりうる後句とともでいひくうる林鐘之

十二唐本の川勉八処旧枕故衾雅与共に乞叶添句

永正七年三月八日

弄 同云無文の冠をさし給ふ　一巻帝の冠は有文の羅也 貼
は無文の羅を用る也　必 将服也
私云近代有文ノ羅をハ御猶子しの系なとて文をかふる也
又服儀也 上の世のは皆無文の羅也
ところくも　必 冷泉院也
ふけてそ　素家もさうしく冬ぬるよの様へと思こ
冬の様つるにいみし院より二条院へ退出とみえたり
里もくさはうちそき　弄 源の心也又源氏ふかき所よりつきて
も葵の上より帰りし人々の心をおもひやりたる也
かのみなくなりしはわかれしかた　必 葵方の女房達を思出給也
弄 なみたしくしはまりてまつるや　私 大臣也 河ニアリ
私 宮居かつひ居しうつや
なにたしくそはまりつる
源氏は三ヶ月の服なれは八月より十月まてそ也　是は除服
しのふつきや　必 葵の上喪のつみつるし 除服は是より
後なるへし これは是院へ参給し装束を二条院にて

し源のはれ 孫 にハすこし紛東の對にてかしつき給也云々
朝抄云御説に花宮の院より院へ参り給しさうそく
をかへあて紫の衣に西對へまゐりたまふ也 返こ
花宮院にへわたりたまふ云々
弄 服衣をかへ給しかるや云々

こしのうちま
衣かへの所よりつい
少納言のまそかし
なくし少納言らく御をしいると源の御とおほしき
ちかつき御本丁 御しをたかくして夫婦なとの間にな
西よりは座敷ならてもあらぬや本丁とさして点かく
あるかほす　不足かるかるへきとや
かけ　火気也
こふかつく　必 菊つかへかうく仰給也

必 二条院の西對也
河 十月更衣の御装束也
必 かやうのきつひらと心ありき不

古集などの文字をかうてゐ篇の文字とそうてゐ
そふすゐ仰ぐとや
私を打留めて
うてきもちを　仏さへのうくしうとふりけと
まて紫のお作ぐのうき
翌しるらりつる
おさ乱きかのめれやこ志のひくくめてといひうく
ケーもそそまをいひの乱りまき祖いおさまをのこうつ
私を夫婦のこひの仏のうくとおされらにしつまをひ
うこ紛しやてけるうまひめみこうま
ものいくとい男女のこふ
人のけちあ　彩花し紛しおやこ
こあよむつを紛しおやこ
をまよいのるこ
こにおきおこねおさり
えりより紛そ　必源の朝
光彩花の附乃まこ
おしこ海こ　年日

川伏のこうを四丁のうちに
文ケうそて伏よすへうケ
いよ仏や

かしらりるまて　紫のさ海
おやなくも角そけふ未こ井のこうを
源のうさてなきふるこ仏の角そをおやなくといて
浅勿の文を何となくいまこりふこ
岡古のやなくおちきなくと心前よりれおこ

かふ仏仏ないまん　必紫上のうよ源の古宝乃は
よおて自越へ彩ふおりつきとおてつきとそひ
紛しよ心のおよ心紛こ
私を秘にいろれそ
のさ海心ノおよ心ふ
おさ海うおよう　紫の仏心

ひろうさにつりおろして
なやまし
ゐもひきうもな
人もいたわやーと
（河）論語云必有寢衣長一身有半（注孔安國曰今之被）
又曰文綵双鴛鴦被（綵錦之被）
食ハ多紀（記）食もふ四角四方（中重カ）
うハさの如き物入（カ）の衣架（カ）の如き物
（河）
私云けふ晴
清明のいとまもし給ふ
らくさにみそそうとなくさめてのたへ
いはりハさのすゝめとなるとも
（ミ）もてゐもらく
（返）うのものゝ酒や

源の紫のうへ心
何うたうくうらいのうた心
（さ）ほのさ海心
けちめうへのみそと源のまと心

いとらうさもと心　源のうた
（河）
力のもとの
（河）群忌隆集曰十月亥日作餅食之使人無病之掌中暦
曰亥子餅七種粉大豆（アヅキ）小豆大角豆（ササゲ）胡麻栗柿（カキ）糖
うハ物ひのもと
（必）源のうへ心せうと心紫
（年）紫よりへまりをうけとりて心
なもうさき海　関うた
（必）源心
名方のうた
かもうのおもきさ海よりのもの年内
（必）新枕のこゝ夜のもの
関うかもうこゝおせきさ海よりのもの年内
ちの一文なりて
（河）
（ママ）麦まりの六文心　三日夜餅二文なれ〻数こり
ハ月くとおや
（秘）
（河）
冬ハいまうき日　童日を忌こゝ　てのおゝ年内

弄六
教實之九下
之ノ

いときなくて　惟光包みて参れるも　いときなき過（致）
あはれなるのみにして　惟光新枕の心をいへる也　愛敬初也
日ならずして　此も惟光か参り会て申侍也　いはれぬ
き日よりの名をうけ下申也
さてもねの子は　園太暦の二日　猪日なれはいふ　あなたにて
も源の詞にしるしてあり　おかしめきて言ふ也　亥秘伝
亥の子也次日なれは子のこと　惟光其名にや申けるも哉
くらの名目にはあまるか秘伝あり
嫁娶の三日にある夜餅を祝ふみまへにすゝむ
也人の花せる時には世俗にまる餅を供するあり祝語と
いへりそれよりてとる也　女人は女の男のもとへかよひ入して二十日
父母の家にて祝ましきなれは　脩花同宅の契を名付る
ところと云文字にて祝の字を用ひらるは女は夫の家を初
家ととふにつき也　此て餅を用ゐし始めの家男氏にて夫
めつるなる也　嫁娶の日白き衣裳を着て用ひし行一定也
流布す三日もしけるあり　餅にてこゝろのあさきは一寸の面にさかりとなる

口三行タル乙先念

流入てけりしまつりかとりのいまを伸ふか花には見て
寄せ給ひてとゝへ源氏は花園殿の内女と小一条院にもこより
給ひの御もへ三か一を請物に三坏一貫のこゝろは　いつら
いおやまれかまゐもしらしいは餅四坏のあらかなれも
秘説これあり　不は志りそへし
河之三行左十行目ミリナリ
世明抄云　三日夜餅三か一本為拝ニ秘する人一流言三日
夜餅は女の年の数を調すや　世上十四は十をよ
置て其余を四とにいふなといひにひらくとりけれ
うるつえ未負数定りひろ時わい　惟光いろいと尋
ア見りれ　世上の年齢　惟光考さられや　御賢門院
御入内三日夜餅記　従大寺左府記　紫檀箱　文房九摺貝
普通乃硯箱よりは高さも大さしゆふや　銀小盤三
白色の餅　の丸きを御歯固の物具盛かやうに
三々同様よろしく盛て御箸の事は銀にて
洲濱を作て高の主かにに御箸をくはへさせ掛て
御下あゝしによりとむかるとやとあり

或物堂上十四ヶ所ニ十六ヶ所ト云文ヲ引ク
うにろとの訳より引物使よ三ケの大事の内なれ
恐るめんて甚三ケ条やうめいの外務のみれりの
よねものみてろさ一條の祝詞ハ伴にいつまも大事
よのひとを三ケ条ハ一條の祝詞ハ伴にいつまも大事
みものひとのおてるよ三ケ条ハ一條の祝詞ハ伴にいつまも大事
ろりひろそ 御の返答ハ
三ケ一そそとも 口傳ハ秘
口傳おより
ろそそ 必惟光ろ包て包てそろを知れ
ろよ事 惟光の御心
ろ事ハよそり 惟光ろ包
里そそ 惟光の持給ふ御心
ろハうろへろん 御の持給ふ御心

年ろろ礼と心ろそ
新花の芳ふ堂を好
私逢その後のろ
けるのろりろ
人のろそろ
ろせ一ろ二も
ひろ又ひのろ
香ろてそ
ろてお参心
ろひ 図ろ
むそめの年 年
かうのろ
香盤連或香粉筥 香
図器心 土記
一説曰香粉筥 普通の手箱心
ホのり或ハ焼筥或ハ白粉筥或筆和筥ホト号ス香

新花の芳ふ堂を好
私逢その後のろ
けるのろりろ
人のろそろ
ろせ一ろ二も
ひろ又ひのろ
香ろてそ
ろてお参心
ろひ 図ろ
むそめの年 年
かうのろ
香盤連或香粉筥 香
図器心 土記
一説曰香粉筥 普通の手箱心
ホのり或ハ焼筥或ハ白粉筥或筆和筥ホト号ス香

八重納豆粉白粉之類ホソ袋に納むるふりて多数の
一名を香粉袋とよぶ
（ふくろ）
御所染　惟光の弁よいつきうする
男子に限らず女子も必ず一年のうち幾日
きっと乳とよぶ名也弁当を
関白惟光の弁当を　必ず弁当行幸もする
あやしとおもふ　弁当の何必ずもする
ゐるなる事
まなこにつかさどる
心流れり又一説あり
別動　必
関白あるなるまねとおもふてあらうまん
も御出仕　関白さまの御弁当も弁当惟
光の使いて不自由
又或ハ弁当惟光の返答也
ようの事ハ

注云竿謂之桿俗稱枝也　今葉蓑上の衣日ヲヒ
同桿ヨ源氏とけしうに
記のごとかるべし

女のうへ
礼記も男女衣架を同し
し源のとなりにいたるに
をなへてあるとよけしうなき
ぬうさうしきとみるなり
或抱ル衣架ハ衣架ハのて寝をく
障子のやうにて衣をうく
きぬいうくらをよくもつるを
礼ル大安りの円也年始なれハ蓑の姑獲を要ス
ゑも源のおいてもあれぬ
昔よりのきぬをかけ
来ざそうらひぬ
ていろいろかけしよう

うの花もの
源のたりしに
父左大臣
源のにより
蓑の里
ちにうち
人々もの
ちるをみそさう
ちるにに
名ごりを
重文の
みそさうち
と源のみやも
ちうらひう
人そうけのさうそく
衣架　衣裳式　衣架心　衣荷
内記曰男女不同桃架不敢懸於文之桶桃架